

平成 23 年度大学連携研究設備ネットワークプロジェクト

－熊本大学・宮崎大学・鹿児島大学 3 大学連携ネットワークの構築－

○山室賢輝^{A)}，佐藤徹哉^{B)}，津志田雅之^{A)}

^{A)}生産構造技術系

^{B)}応用分析技術系

1 はじめに

大学連携研究設備ネットワークとは、国立大学における研究設備の老朽化等による危機的な状況を改善し、我が国の研究教育の基盤を整備するとともに、先導的研究を推進するため、全国的な連携調整の下に、分析機器の相互利用活性化と研究水準の向上を図る取り組みである。今回はそのネットワークによる相互利用と共同研究を促進するため、南九州の 3 大学（鹿児島大学、宮崎大学、本学）でワークショップを開催した。またワークショップ後に実施した施設の相互見学や共同利用による取り組みについて報告する。

2 取り組み内容

2.1 熊本大学・宮崎大学・鹿児島大学共同ワークショップへの参加

本学連携ネットワーク代表である國武雅司教授と共に技術部山室、佐藤が参加し、熊本大学におけるネットワークへの取り組みと共同利用施設（工学研究機器センター他）の紹介を行った。参加者は 16 名、会場は宮崎大学産学・地域連携センター機器分析支援部門にて開催された。当日のスケジュールを以下に示す。

平成 23 年 9 月 12 日

14:00～14:05	開会の挨拶	宮崎大学 産学・地域連携センター 機器分析支援部門 松下洋一 教授
14:05～14:10	大学連携ネットワークとプロジェクトの概要	鹿児島大学 FSRC 機器分析施設 根建心具 特任教授
14:10～15:00	宮崎大学 産学・地域連携センター機器分析支援部門の 現状と取組を専任教員としての立場から	宮崎大学 産学・地域連携センター 機器分析支援部門 境健太郎 専任准教授
	宮崎大学 産学・地域連携センターと宮崎大学工学部教育 研究支援技術センターとの連携について	宮崎大学 工学部 教育研究支援技術センター 原口智宏 技術職員
15:00～15:20	— 休 憩 —	
15:20～16:10	鹿児島大学機器分析施設の環境整備と問題点	鹿児島大学 FSRC 機器分析施設 大園義久 特任専門員
	機器分析施設スタッフの共同研究への参画	鹿児島大学 FSRC 機器分析施設 根建心具 特任教授
16:10～17:00	熊本大学における大学連携ネットワークへの取り組みと 現状と特徴	熊本大学 工学部 技術部 山室賢輝，佐藤徹哉
	熊本大学における大学連携ネットワークを取り巻く状況	熊本大学 自然科学研究科 國武雅司 教授
17:00～17:05	閉会の挨拶	鹿児島大学 FSRC 機器分析施設 根建心具 特任教授

平成 23 年 9 月 13 日

9:00～12:00

宮崎大学 FE-SEM（日立ハイテク S-5500）を用いた共同体験測定

本ワークショップでは、各大学のおかれた状況を中心に報告がなされ、相互理解が深まった。他大学の特色や本学の優位性（あるいは取組が遅れている点等）を再認識することができた。

2.2 共同研究打ち合わせおよび鹿児島大学フロンティアサイエンス研究推進センター（FSRC）訪問

ワークショップ参加後、3 大学間での機器の相互利用の可能性を探っていたところ、本学のある研究室からの依頼で検討することとなった。そこで H23 年 10 月 17 日に山室が帯同し鹿児島大学 FSRC を訪問、共同研究についての打ち合わせを実施し、試験的に分析を依頼した。結果としては、分析や実験方法に問題が生じ、本格的に実施することは困難となったが、別件で平成 24 年度に実施するテーマを見出すことができた。また訪問の際には、鹿児島大学の機器分析施設を見学した。

2.3 熊本大学共同利用施設訪問

H24 年 3 月 14、15 日の両日、鹿児島大学 FSRC より久保臣悟氏、十川三臣氏が本学を訪問された。工学研究機器センターや自然科学・先進材料ナノ構造解析システム室などを見学してもらい、FE-SEM と TEM でデモを実施した。見学引率やデモについては山室と津志田が担当した。

3 まとめ

鹿児島、宮崎の両大学を見学して感じたことは、施設への機器の集約化が進んでいた点である。鹿児島大学では FSRC 内の機器分析施設、宮崎大学では産学・地域連携センター内の機器分析支援部門といった施設で全学的なレベルで共同利用を展開している。本学の場合は、機器単体で見ると他大学より特色ある装置を保有している一方、共同利用という点においては、様々な施設や利用形態が混在し、機器ユーザーにとっては必ずしも恵まれた状況にはないように感じた次第である。このように今回の交流を通じて、互いの状況についての理解が深まり、共同利用（研究）の足がかりが築けたことは、非常に有意義であった。今後は研究利用のみならず人的交流も活発に行い、互いに切磋琢磨しながら技術力の研鑽に努めることができれば幸いである。